









病虫害発生予察情報予報第1号

佐賀県農業技術防除センター


I. 予報の概要

作物名	病虫害名	5月の予想発生量		病虫害防除のてびきの記載頁	予報対象の病虫害 (抜粋)	
		平年比	前年比			
普通作	水稻(早期・早植え)	いもち病	多	並	131~140 142~147	 いもち病
		ばか苗病	並	並	131~140	
		イネミスゾウムシ	多	やや多	168-170	
		スクミリンゴガイ	やや多	やや多	174-180	
特記事項						
1. いもち病 普通期水稻については、既存の種子消毒剤にベノミル水和剤を加えた種粒消毒を徹底する。また、育苗箱で種粒が露出すると本病が発生しやすいため、覆土を適正に行う。いもち病常発地帯では育苗期から防除を行う。						
2. 病虫害全般 育苗箱処理剤は、施薬量が少ないと防除効果が低下するので、適正な量を処理する。						

作物名	病害虫名	5月の予想発生量		病害虫防除のてびきの記載頁	予報対象の病害虫(抜粋)	
		平年比	前年比			
施設野菜 共通	特記事項 1. アザミウマ類、コナジラミ類 今後、気温の上昇とともに増加するため、低密度時に防除を徹底する。また、これらが媒介するウイルス病がみられた場合は、早急に抜き取り、圃場外で適切に処分する。 栽培終了後はこれらが圃場外へ飛び出さないよう、ハウス密閉処理を行う。					
野菜	イチゴ (本圃)	ハダニ類	多	多	204~205	うどんこ病 
		うどんこ病	多	多	194~196	
		灰色かび病	やや多	やや多	197~198	
		アブラムシ類	やや多	やや多	210~211	
	特記事項 1. ハダニ類、うどんこ病 本圃で多発生すると、隣接する親株床への拡散または伝染するため、薬剤防除を行い発生を抑える。					
	イチゴ (親株床)	ハダニ類	多	やや多	204~205	親ハダニ類 株での類 
		うどんこ病	並	並	194~196	
		アブラムシ類	やや多	並	210~211	
	特記事項 1. ハダニ類、うどんこ病 一部の圃場の親株の下位葉にハダニ類の発生がみられる。下位葉の葉かぎを行うとともに、うどんこ病と合わせ親株床から防除を実施する。 2. 立枯性病害 立枯性病害(炭疽病、萎黄病、疫病)が発生した親株は、早急に圃場外で適切に処分する。炭疽病は親株床から定期的な薬剤防除を実施する。					
	キュウリ (半促成)	べと病	多	多	173~174	 べと病(葉裏)
うどんこ病		並	並	179~181		
褐斑病		並	並	177		
灰色かび病		やや多	やや多	175		
アザミウマ類		やや多	多	188~189		
コナジラミ類		やや多	並	187~188		
特記事項 1. アザミウマ類、コナジラミ類 秋季の圃場への再侵入を抑えるため、栽培終了前まで薬剤防除を行い、圃場内から野外への飛び出しを抑制する。						

作物名	病害虫名	5月の予想発生量		病害虫防除のてびきの記載頁	予報対象の病害虫(抜粋)	
		平年比	前年比			
野菜	アスパラガス	茎枯病	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	313	 アザミウマ類
		褐斑病	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	314	
		斑点病	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	314	
		アザミウマ類	<u>多</u>	<u>多</u>	30~302	
		アブラムシ類	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	303	
特記事項 1. 茎枯病、褐斑病、斑点病 立茎時の発病前から薬剤防除を実施する。散布間隔は3週間を目安とし、前年に多発生した圃場や降雨日が続く場合は短縮する。茎枯病の発生を抑えるため、降雨時はサイドビニルを降ろし雨の降り込みを防ぐ。また、発病茎は見つけ次第地際部から切断し圃場外で適切に処分する。 2. アザミウマ類 5~7月は圃場内への飛び込みが増加しやすい。若茎及び親茎への寄生や食害による被害を防ぐため、虫見板(約20×30cm)への払い落としにより発生頭数を調査し、成虫が1ヶ所当たり3~6頭/以上認められる場合は薬剤を散布する。						
トマト	アスパラガス	葉かび病	やや少	やや少	221~222	 コナジラミ類
		灰色かび病	<u>多</u>	<u>多</u>	216~217	
		コナジラミ類	<u>多</u>	<u>多</u>	149~151 224~226	
		ハモグリバエ類	<u>やや多</u>	<u>多</u>	158~159 228	
特記事項 1. 黄化葉巻病(TYLCV)・茎えそ病(CSNV)等 黄化葉巻病が一部圃場で発生している。発病株は早急に抜き取り、適切に処分するとともに媒介虫の防除を徹底する。						
ナス	アスパラガス	すすかび病	<u>やや多</u>	並	231~232	 ナスすすかび病
		灰色かび病	<u>やや多</u>	<u>多</u>	230~231	
		アザミウマ類	<u>やや多</u>	<u>やや多</u>	152~157 242	
		コナジラミ類	<u>やや多</u>	<u>多</u>	149~151 240~241	
		ハモグリバエ類	<u>やや多</u>	<u>多</u>	158~159 243	
タマネギ	アスパラガス	べと病	<u>多</u>	<u>多</u>	277~278	 べと病
		ボトリチス葉枯症	並	並	279	
		ネギアザミウマ	<u>やや多</u>	<u>多</u>	285~286	
特記事項 1. べと病 発生を認めている圃場では、早期に発生した発病株が伝染源となるため、栽培後半も防除を継続し、圃場内での発生を抑える。						

作物名	病虫害名	5月の予想発生量		病虫害防除のてびきの記載頁	予報対象の病虫害 (抜粋)	
		平年比	前年比			
果樹	カンキツ	そうか病	やや多	やや多	216～218	 ミカンハダニ
		かいよう病	やや多	多	220～222	
		灰色かび病	多	多	222～223	
		ミカンハダニ	多	多	239～242	
	特記事項 1. 灰色かび病 本病が問題になる園や着花数が多い園では落弁期に加え、満開期にも防除を行う。 2. アブラムシ類 一部圃場で発生が認められる。発生状況を確認し、少発生時に薬剤防除を行う。					
ナシ	黒星病	多	多	282～285		
	特記事項 1. 黒星病 多発生の気象条件となっているため注意する。5～6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する（ 薬剤は施肥・病虫害防除・雑草防除のてびきP282～285を参照 ）。ただし、発病が認められた場合や長雨等で薬剤散布ができなかった場合にはDMI剤を散布する。					
ブドウ	黒とう病	やや多	やや多	327～329		
	べと病	やや多	やや多	330～332		
特記事項 1. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。 2. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 袋かけ前(大豆大期)に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。						
フルーイ	特記事項 1. かいよう病 感染防止のため、感染の有無に関わらず防除を徹底する（ 詳細については防除のてびきP358～359を参照 ）。枝や幹から樹液が漏出する症状、葉の斑点症状や枝の枯れ込みなどの早期発見に努め、確認された場合は直ちに罹病部位を切除する。なお、未発生園で症状を確認した場合は関係機関に連絡する。					
	果樹カメムシ病	少	少	かんキツ：245～248 ナシ：299、ブドウ：344		
果樹全般	特記事項 1. クワゴマダラヒトリ 県内の一部の果樹園で多発生している。発生状況を確認し、早期に薬剤防除を実施する。			 クワゴマダラヒトリ幼虫		

作物名	病虫害名	5月の予想発生量		病虫害防除のてびきの記載頁	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	<u>やや多</u>	やや少	398～399	 クワシロカイガラムシ (雄繭)
	チャノミドリヒメヨコバイ	<u>多</u>	<u>多</u>	403～404	
	チャノキイロアザミウマ	並	並	404～405	
特記事項 1. クワシロカイガラムシ 本年は本種の発生が多い。幼虫ふ化期は5月中～下旬である。園内のふ化状況を観察し、発生園ではふ化最盛期に防除を確実に実施する。					
2. チャトゲコナジラミ 5月中～下旬（第一世代若齢幼虫期）にクワシロカイガラムシと同時防除を行う。					
3. ナガチャコガネ 二番茶の萌芽開葉初期（5月下旬～6月中旬頃）に、羽化期～成虫飛来初期を迎え、防除適期となるため、摘採前使用日数に注意して防除を行う。					

注1) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注2) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
7ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

5月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する5月の気象条件については、福岡管区気象台発表の3ヶ月予報（平成28年4月25日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3ヶ月予報における5月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	30 (19.5℃)	50	高い
降水量	20	40 (198.2mm)	40	やや多い

Ⅲ. 5月の予報

水稲（早期・早植え）

巡回調査 4月19日



巡回調査時の様子（早期水稲）

1. いもち病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

平成27年の穂いもちの発生株率は、上場地域の早期水稲（8月上旬）で6.0%（平年3.4%）、北部山間の早植え水稲（9月上旬）で29.8%（平年8.8%）、普通期水稲（10月上旬）で35.7%（平年9.8%）であり、早期は平年よりやや多く、早植え、普通期は平年より多かった。〈+〉

(2) 水稲籾のいもち病菌保菌率

県内各地の巡回調査地点から採取した平成27年産籾のいもち病菌保菌率は、早植えうるち品種では平年よりやや高く、普通期うるち品種においては平年より高かった(表1)。〈+〉

表1 巡回調査圃場における平成27年産水稲籾のいもち病菌保菌率
(農業技術防除センター調査)

作 型	品 種	調査圃場数	保菌籾率	平年 (保菌籾率)
早期水稲	コシヒカリ	12 圃場	0.2 %	1.0 %
早植え水稲	うるち品種	16	4.6	1.9
普通期水稲	うるち品種	38	3.4	0.6
	もち品種	10	0	0.1

注) 各圃場当たり早期水稲、早植え水稲では50粒の籾を、普通期水稲では25粒の籾について保菌状況を調べた。

保菌籾率の平年は平成17～26年産の平均値。

(3) 5月の気象予報

降水量は平年よりやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 水田周辺に放置された予備苗から葉いもちが蔓延することがあるので、補植後は早急に取り除く。

(2) 苗いもちが見られたら、発生した苗箱は使用せず、早急に取り除くとともに防除を行う。

(3) その他については、特記事項を参照する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：**平年より多い**（前年よりやや多い）

発生時期：**平年より早い**（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 越冬密度

昨年の発生は平年並であり、越冬密度は平年並と考えられる。〈±〉

② 巡回調査

発生株率0%（平年0.5%、前年1.6%）

平年比：並〈±〉 前年比：やや少〈-〜±〉

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件で、また越冬成虫の本田飛び込みの時期は平年より早いと予想される。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 前年発生が多かった地域では本虫に登録のある箱処理剤を施用する。

(2) 越冬成虫は4月中旬～6月上旬に水田へ侵入する。本田での発生状況の把握に努め、成虫が10株当たり5頭以上みられたら、粒剤を散布する。

3. スクミリンゴガイ

1) 予報の内容

発生量：**平年よりやや多い**（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況

① 平成28年4月に調査した用排水路における平均越冬生貝率は、36.0%と平年(44.7%)並であった(表2)。〈±〉

② 水田内での越冬生貝率は、平成27年12月～平成28年2月の平均気温が7.57℃と平年(6.56℃)よりやや高かったことから、平年よりやや多いと推定される。(図1：過去の冬期の気温と翌春の貝の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められている。)〈±〜+〉

(2) 5月の気象予報

気温が高く、本貝による被害の発生時期は平年より早いと予想される。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 用排水路・クリークにおいて密度の高い地域では、貝及び卵塊を捕殺する。

(2) 発生圃場では、浅水管理を徹底する。

(3) 発生が多い圃場では、薬剤防除を行う。

表2 用排水路におけるスクミリンゴガイの越冬生貝率の年次推移

(農業技術防除センター4月調査)

調査地点	越冬生貝率 (%)					
	H24年	H25年	H26年	H27年	H28年	H18～27年の平均a)
武雄市(コンクリート水路)	31.0	81.7	29.7	67.0	97.8	—
鳥栖市(コンクリート水路)	2.0	11.9	16.3	9.3	5.4	
白石町(クリーク)	49.6	41.0	18.7	19.0	4.9	
平均	27.5	44.9	21.6	35.1	36.0	44.7

a) H18～27年の平均値は、H17-18年は県内5地点、H19-22年は4地点、H23-26年は3地点から算出。

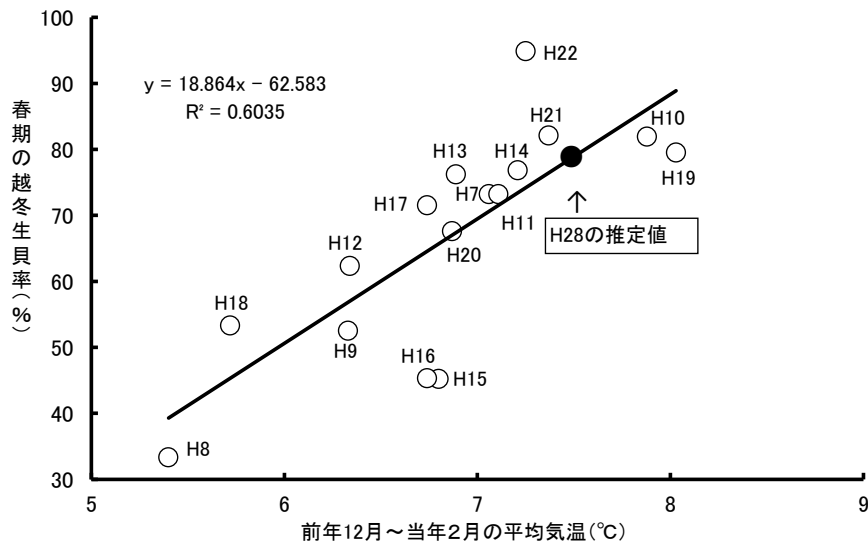


図1 冬期(12~2月)の平均気温と水田内でのスクミリンゴガイの越冬生員率(4月)との関係
 ○: H7~H22の実測値(佐賀市の気温、川副町の同一水田における越冬生員率)
 ●: H27年12月~H28年2月の気温を用いて上記の関係式から推定したH28年春期の越冬生員率

イチゴ(本圃)

巡回調査(12圃場)
 調査日: 4月18~25日



巡回調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査(図1参照)

発生株率: 32.8% (平年29.4%、前年52.7%)

平年比: 並(±)

前年比: 少(-)

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場間で発生程度が異なるため、発生状況を確認し薬剤防除を実施する。

(2) その他については特記事項を参照。

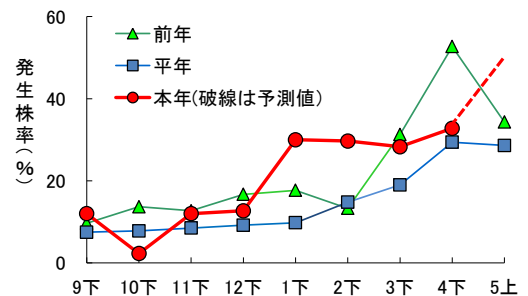


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量: 平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査(図1参照)

発生株率: 23.7% (平年12.0%、前年12.7%)

平年比: 多(+)

前年比: 多(+)

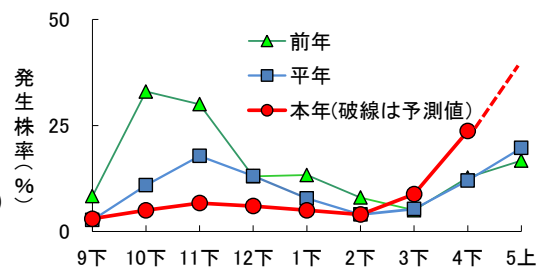


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

(2)5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。
- (2) その他については特記事項を参照。

3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0.5%、前年0.3%）

平年比：やや少〈-～±〉

前年比：並〈±〉

(2)5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場での発生状況を確認し、薬剤防除を実施する。

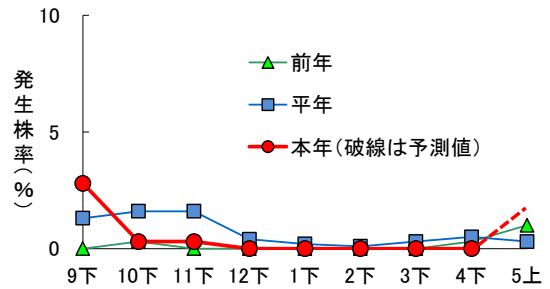


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

イチゴ（育苗圃）

（巡回調査：4月18日～25日）



巡回調査時の生育状況

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：3.6%（平年3.0%、前年6.2%）

平年比：並〈±〉

前年比：やや少〈-～±〉

(2)5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉に寄生しているので、古葉を除去するとともに、薬液が十分かかるよう丸噴口等を用いて丁寧に散布する。
- (2) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。
- (3) その他については特記事項を参照。

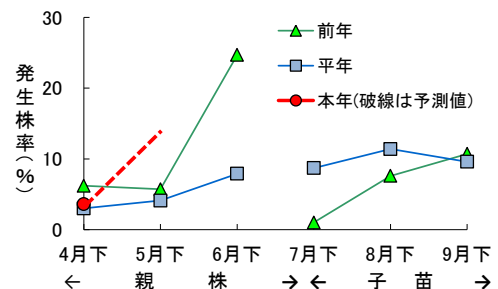


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：1.2%（平年5.1%、前年9.5%）

平年比：やや少（-～±）

前年比：少（-）

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 薬液散布においては。薬液が葉裏にかかるよう丸噴口等を用いて丁寧に散布する。

(2) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

(3) その他については特記事項を参照。

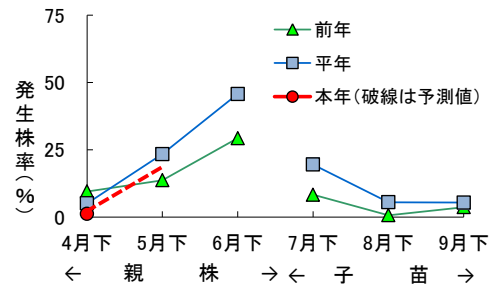


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：2.0%（平年5.4%、前年13.8%）

平年比：やや少（-～±）

前年比：少（-）

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

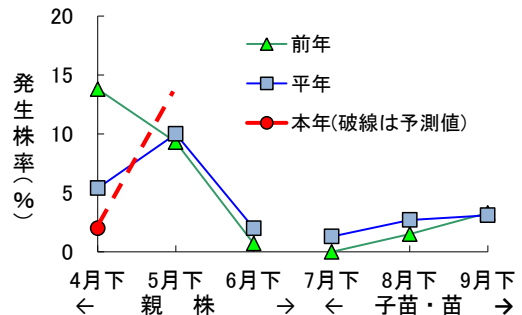


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

キュウリ（半促成）

巡回調査（8圃場）
調査日：4月18～22日



巡回調査圃場の様子

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：36.9%（平年16.7%、前年12.5%）

平年比：多（+）

前年比：多（+）

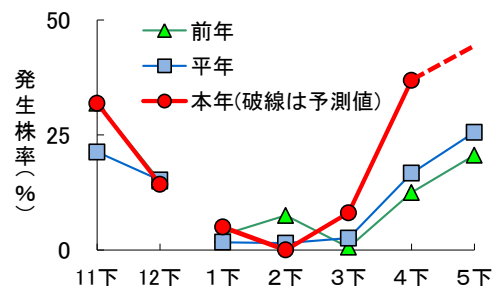


図1 キュウリベと病の発生推移

(2)5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

2. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

巡回調査 (図1参照)

発生株率：0% (平年0%、前年0%)

平年比：並〈±〉

前年比：並〈±〉

(2)5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

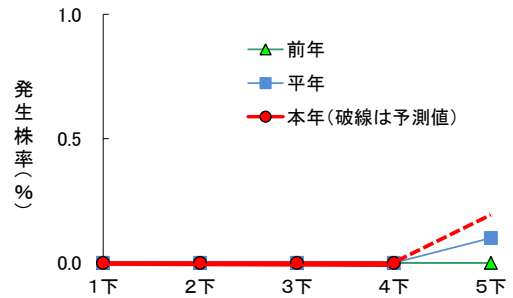


図1 キュウリ灰色かび病の発生推移

3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生株率：1.3% (平年9.1%、前年11.9%)

平年比：やや少〈-～±〉

前年比：やや少〈-～±〉

(2)5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

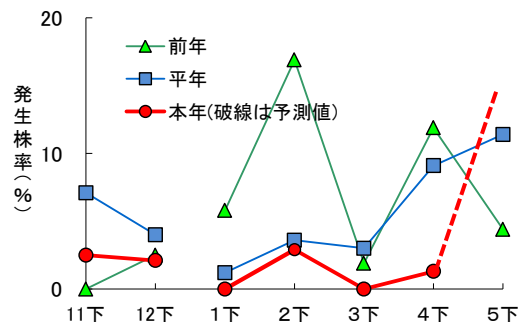


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生株率：0% (平年0.7%、前年0.6%)

平年比：やや少〈-～±〉

前年比：やや少〈-～±〉

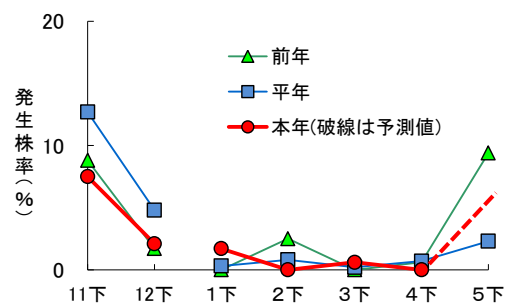


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

(2)5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

アスパラガス

巡回調査 (8圃場)

調査日 : 4月16日~18日



巡回調査圃場の様子

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生株率 : 0.1% (平年0.1%、前年0.1%)

平年比 : 並 (±)

前年比 : 並 (±)

(2)5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)特記事項を参照。

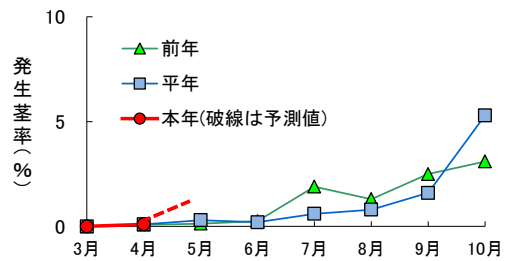


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生株率 : 0% (平年0%、前年0%)

平年比 : 並 (±)

前年比 : 並 (±)

(2)5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)特記事項を参照。

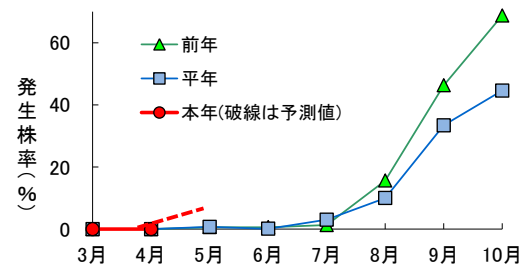


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量 : 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生株率 : 0% (平年0.1%、前年0%)

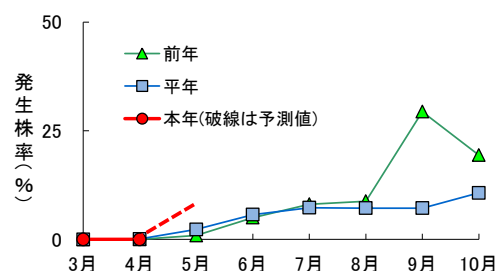


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

平年比：並（±）

前年比：並（±）

（2）5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3）防除上注意すべき事項

（1）特記事項を参照。

4. アザミウマ類

1）予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2）予報の根拠

（1）発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：13.1%（平年11.7%、前年0.3%）

平年比：並（±）

前年比：やや多（±～+）

（2）5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3）防除上注意すべき事項

（1）特記事項を参照。

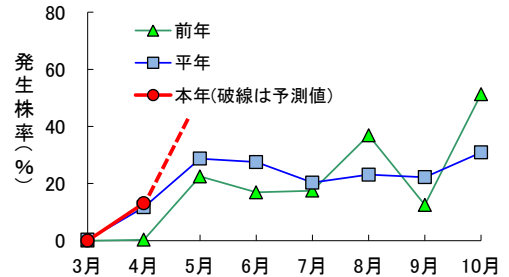


図1 アザミウマ類のアスパラガスでの発生推移

5. アブラムシ類

1）予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2）予報の根拠

（1）発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0.4%、前年0.6%）

平年比：やや少（-～±）

前年比：やや少（-～±）

（2）5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3）防除上注意すべき事項

（1）発生状況を確認し初期に薬剤防除を行う。

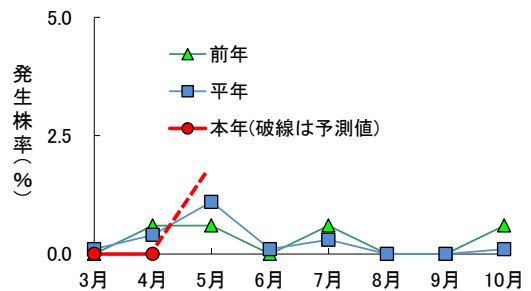


図1 アブラムシ類のアスパラガスでの発生推移

トマト

巡回調査（8圃場）

4月18～22日

1. 葉かび病

1）予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）



巡回調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生株率：0% (平年9.6%、前年15.0%)

平年比：少く-

前年比：少く-

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

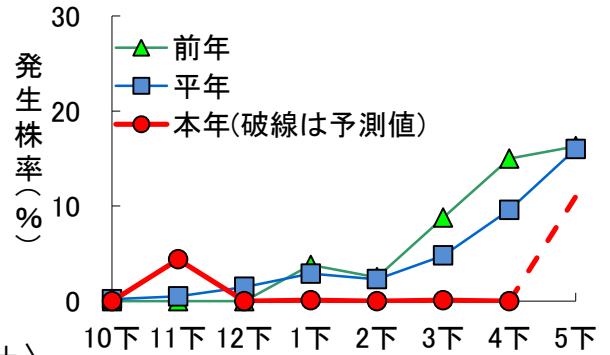


図1 トマト葉かび病の発生推移

2. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生株率：17.5% (平年11.5%、前年16.3%)

平年比：やや多 (±~+)

前年比：並 (±)

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

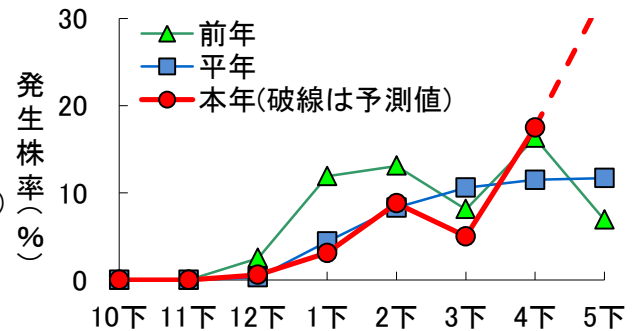


図1 トマト灰色かび病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病果や発病葉は除去し、防除を徹底する。

3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

発生株率：9.4% (平年4.9%、前年2.5%)

平年比：多 (+)

前年比：多 (+)

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件 (+)

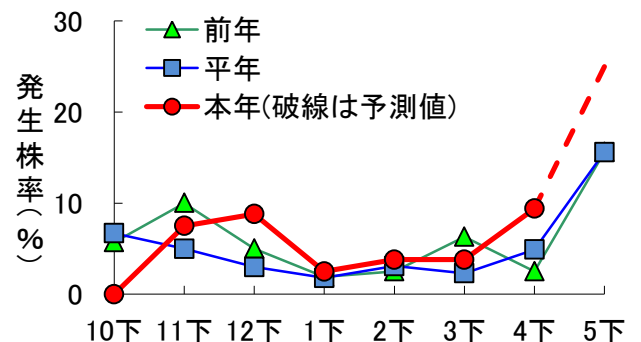


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

4. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査 (図1参照)

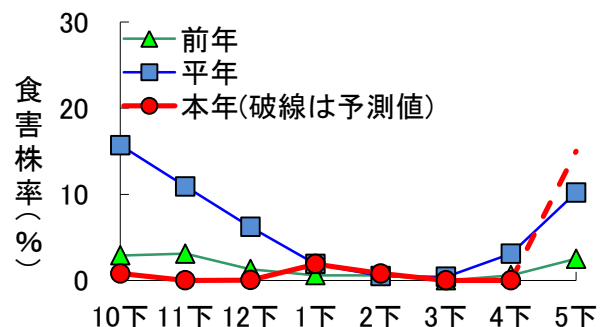


図1 ハモグリバエ類のトマトでの食害株率推移

食害株率：0%（平年3.1%、前年0.6%）
 平年比：やや少（-～±）
 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の使用回数が増えないように計画的な防除を行う。

ナス（促成）

巡回調査（8圃場）
 4月19～22日



巡回調査圃場の様子

1. すずかび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：33.1%（平年36.5%、前年37.5%）

平年比：並（±）

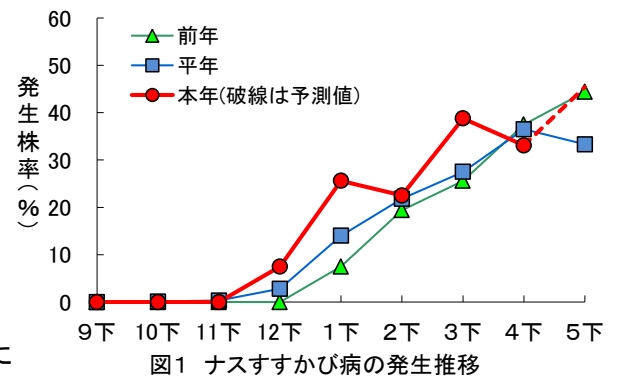
前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 耐性菌が発生しやすいQoI剤及びSDHI剤、DMI剤について、使用回数が増えないよう計画的な防除を行う。



2. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：3.1%（平年3.1%、前年1.3%）

平年比：並（±）

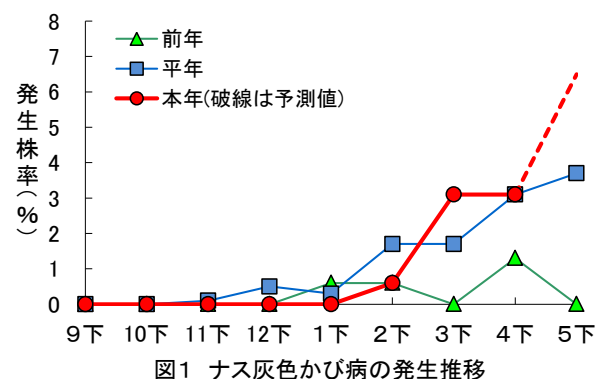
前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病部位は早めに除去し、発生初期からの防除を徹底する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう計画的な防除を行う。



3. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：5.0%（平年8.4%、前年8.1%）

平年比：やや少く（～±）

前年比：やや少く（～±）

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

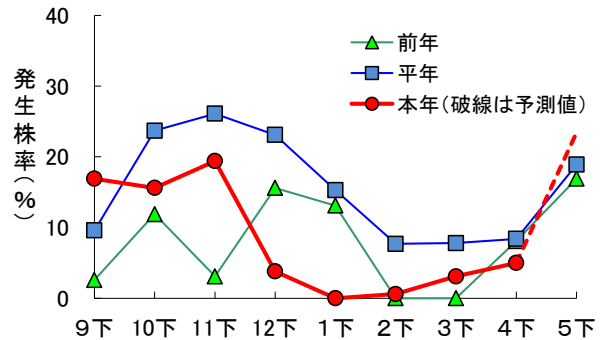


図1 アザミウマ類のナスでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう計画的な防除を行う。

(3) その他については特記事項を参照。

4. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生株率：2.5%（平年12.6%、前年3.8%）

平年比：やや少く（～±）

前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件（+）

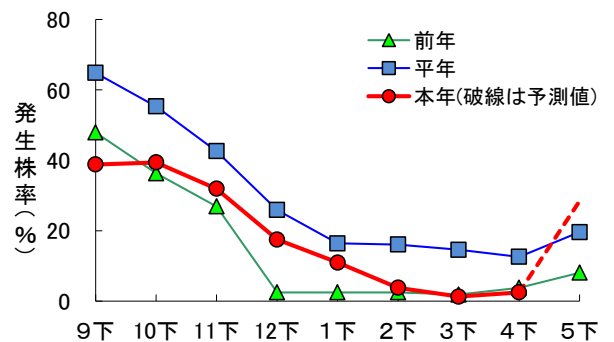


図1 コナジラミ類のナスでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう計画的な防除を行う。

(3) その他については特記事項を参照。

5. ハモグリバエ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

食害株率：0%（平年6.9%、前年0%）

平年比：やや少く（～±）

前年比：並（±）

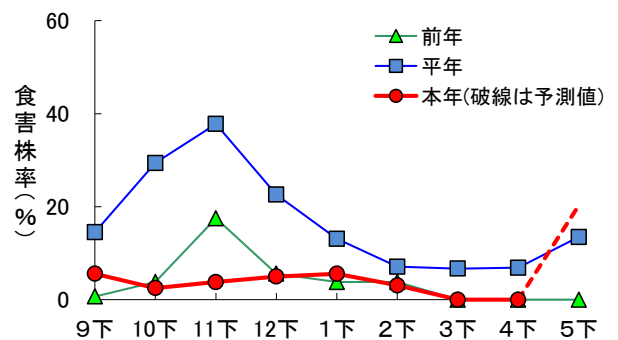


図1 ハモグリバエ類のナスでの食害株率の推移

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるように丁寧に散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう計画的な防除を行う。

タマネギ

巡回調査（12圃場）

4月22日



巡回調査圃場の様子

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：50.3%（平年11.1%、前年21.0%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 5月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件

〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

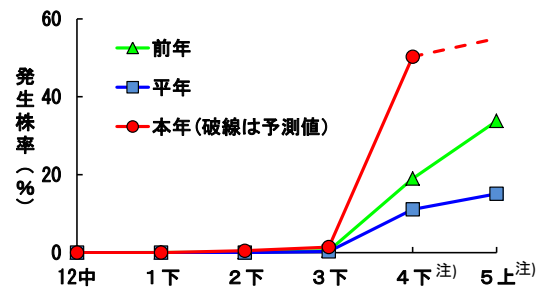


図1 タマネギベと病の発生推移

注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：4.7%（平年22.6%、前年29.1%）

平年比：やや少〈-~±〉

前年比：やや少〈-~±〉

(2) 5月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±~+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生初期の防除を徹底する。

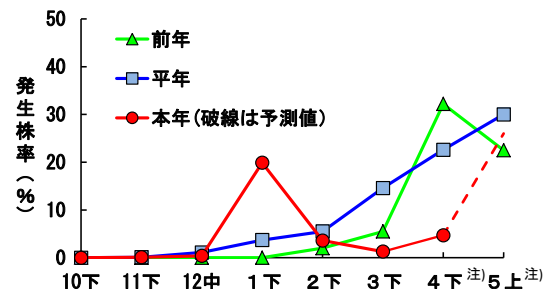


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生株率: 12.0% (平年22.8%、前年4.6%)

平年比: やや少 (一~±)

前年比: 並 (±)

(2) 5月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本虫は薬剤がかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、かけむらがないように散布する。

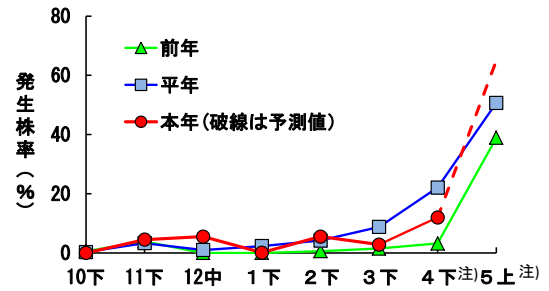


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移
注)4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

カンキツ

巡回調査 (8圃場)

4月18~20日



巡回調査圃場の様子

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生葉率: 0% (平年0%、前年0%)

平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多くやや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実への感染を防止するため、落弁期に防除を行う。

(2) 果実に葉害を生じる場合があるため、落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。

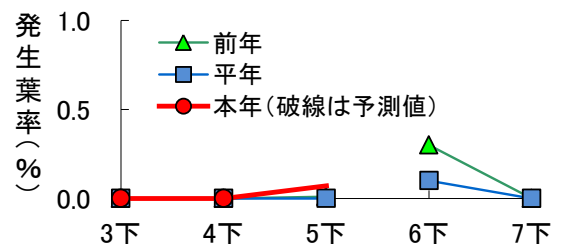


図1 カンキツそうか病の発生推移

(注: 5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1参照)

発生葉率: 0% (平年0.5%、前年0%)

平年比: やや少 (一~±)

前年比: 並 (±)

②昨年、中晩柑類を中心に本病の多発生圃場が確認されている (±~+)

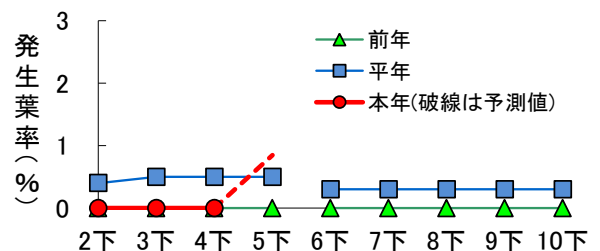


図1 カンキツかいよう病の発生推移

(注: 5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)

- (2) 5月の気象予報
降水量がやや多く、やや多発生の条件
〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病が前年に発生した園や、風当たりが強い園、罹病性品種（ネーブル、はるみ等）が植栽された園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）では、無機銅剤による防除を行う。
- (2) 無機銅水和剤（クレフノン200倍加用）またはICボルドー66D（アビオンE1,000倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安はクレフノン200倍加用無機銅水和剤で20～25日で、ICボルドー66Dの場合は30日とする。
- (3) ICボルドー66Dは、展葉期に単剤で散布すると、葉に石灰による薬害が発生するので、散布する際はアビオンE1,000倍を必ず加用する。

3. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

- (1) 温州みかんの着花状況
本年は着花数が多く、本病の発生に好適な条件となっている〈+〉。

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 古い花卉は発生源となるため、樹や枝をゆすって人為的に落とす。
- (2) その他は特記事項を参照する。

4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉率：17.4%（平年3.8%、前年3.4%）

平年比：多〈+〉

前年比：多〈+〉

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多いものの、気温が高く、やや多発の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 一部に多発生園がみられる。圃場での発生状況を確認し防除を徹底する。4月～6月はマシン油乳剤の使用を基本とするが、樹勢が低下している樹では、マシン油乳剤の散布を控え殺ダニ剤で対応する。

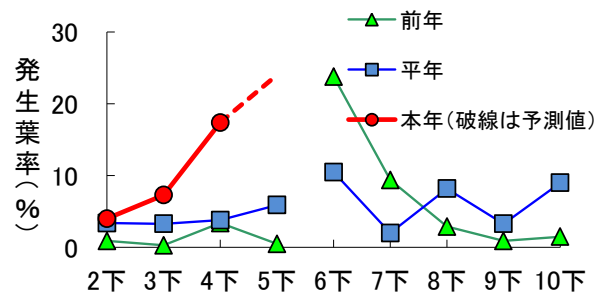


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移
（注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査）

ナシ

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並く±

前年比：並く±

発生果率：0%（平年0.1%、前年0.2%）

平年比：並く±

前年比：やや少く-～±



巡回調査圃場の様子

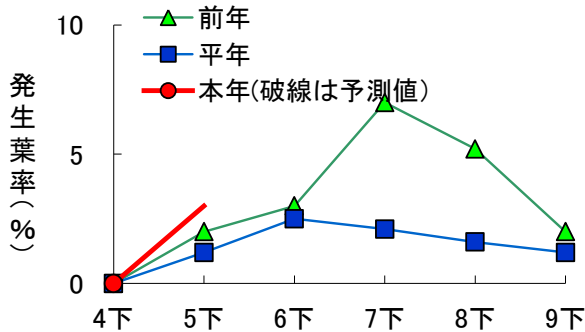


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

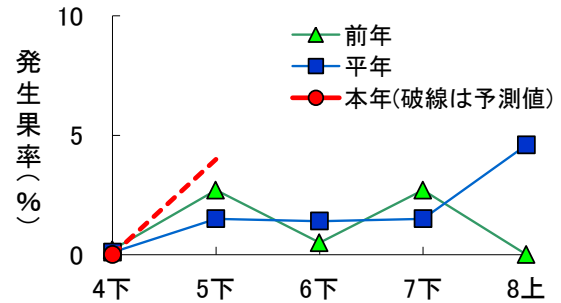


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

(2) 主要感染期である開花期前後（本年4月1～21日）の気象（伊万里市）

本病の感染に好適な条件で推移した。〈+〉

平均気温：15.4℃（平年13.2℃、前年14.2℃）

降雨量：319mm（平年121mm、前年247mm）

(3) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) スピードプレイヤーで薬剤散布する場合は、全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなどして、丁寧に散布する。
- (2) 発病した葉や果実は伝染源となるため除去する。
- (3) その他は特記事項を参照。

ブドウ

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）



巡回調査圃場の様子

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）

2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件
（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。
- (2) 新梢葉への感染を防ぐため、萌芽期～新梢伸長期に防除を行う。

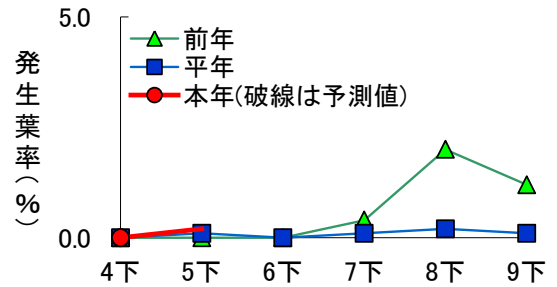


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. べと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 巡回調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）
平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多く、やや多発生の条件
（±～＋）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病葉は、伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。

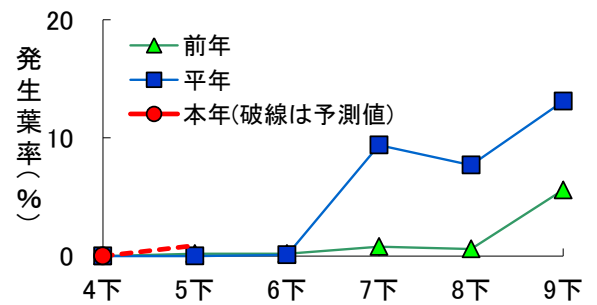


図1 ブドウべと病の発生推移

果樹全般

1. 果樹カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 果樹カメムシ類の越冬状況（表1参照）

① 平均越冬虫数：0.03頭/m²（平年0.36頭/m²、前年0.18頭/m²）
平年比：少（-） 前年比：少（-）

② 越冬地点率：9.1%（平年46.7%、前年31.8%）
平年比：少（-） 前年比：少（-）

③ 以上のことから越冬密度は平年より少ないと考えられる。

(2) 4月～8月上旬における果樹園へのカメムシ飛来量の予測（図1参照）

越冬状況調査の結果から、果樹園への果樹カメムシ類の飛来量は、平年及び前年より少ないと予測される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹カメムシ類の飛来については、カンキツ（開花期前後）、ナシ、ウメ、モモなどで注意する。
- (2) 越冬密度は地域によって異なるため、園内をこまめに見回り、飛来状況に注意する。
- (3) 果樹カメムシ類は、樹高の高い樹木に一旦飛来し、その後果樹園に飛来する傾向があるので、防風樹等は必要以上に高くないように剪定をする。

表1 各調査地点におけるチャバネアオカメムシ成虫の平均越冬虫数¹⁾及び越冬地点率の推移(平成18~28年).

No.	調査地域	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	平年
1	みやき町	-	0.3	0	0	3.0	0	0	0	0.3	0	0.3	0.40
2	吉野ヶ里町	1.7	0	1.0	1.0	0	0	0	0	0	0	0	0.37
3	神崎市	0	0	0.3	0.3	0	0.3	0.7	0	3.0	1.7	0	0.63
4	佐賀市	1.2	0	0.3	0.7	0.3	0	0	0	0	0	0.3	0.26
5	小城市	0.3	0.3	0.3	0.3	0	0	0	0	0	0.3	0	0.16
6	多久市1	0.3	0.2	0.8	0.3	0.7	0	0	0	0	0	0	0.23
7	多久市2	-	-	-	0	0	0	0	0	0.3	0	0	0.05
8	唐津市1	1.2	0	0	0	0	0.3	0	0	0.3	0	0	0.19
9	唐津市2	-	-	-	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0.04
10	唐津市3	-	-	-	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0.04
11	伊万里市1	2.2	0	0	0.3	0	0	0	0	0	0.3	0	0.28
12	伊万里市2	-	-	-	0.7	0.7	0	0.3	0	0.3	0	0	0.29
13	伊万里市3	-	-	-	1.3	0.7	0	1.0	0	1.0	0	0	0.57
14	武雄市1	3.3	0	0	0.3	0	0	1.3	0.3	0	0	0	0.52
15	武雄市2	-	-	-	0	0.3	0	0.3	0	0.7	0	0	0.19
16	鹿島市1	1.4	0	0	0.3	0.7	0	0.3	0	0	0.3	0	0.30
17	鹿島市2	-	-	-	0.3	0.7	0.3	0	0	0	0	0	0.19
18	鹿島市3	-	-	-	0.3	0.3	0	1.0	0.3	0	0.3	0	0.33
19	太良町1	1.5	0	0.1	0	0.7	0.3	0.7	0.3	0	0	0	0.36
20	太良町2	-	-	-	0.7	0.7	0.3	0.7	0.3	0.3	0	0	0.44
21	太良町3	-	-	-	0.7	2.3	0.7	1.0	0	0	0.7	0	0.77
22	太良町4	-	-	-	0	1.0	0	0.7	0	0	0.3	0	0.29
平均越冬虫数		1.31	0.07	0.26	0.37	0.55	0.10	0.36	0.06	0.29	0.18	0.03	0.36
越冬地点率(%)		90.0	27.3	54.5	72.7	59.1	27.3	50.0	18.2	36.4	31.8	9.1	46.7

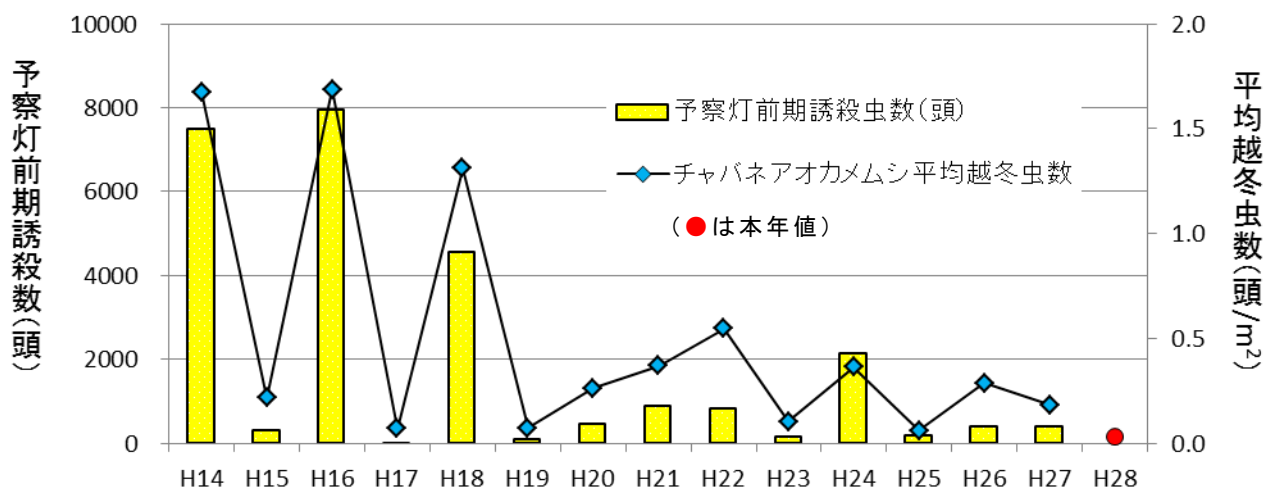


図1 チャバネアオカメムシ成虫の平均越冬虫数(頭/m²)及び予察灯前期誘殺虫数¹⁾の年次推移.

¹⁾ 県内に設置された予察灯3台による5月~8月10日までの総誘殺虫数の平均値を示す

茶

巡回調査(7圃場)
4月18~19日

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い(前年よりやや少ない)



巡回調査圃場の様子

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況 (図1参照)

発生葉率：3.6% (平年4.1%、前年10.6%)

(発生圃場率：100%)

平年比：並(±)

前年比：少(－)

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多いものの、気温が高く、やや多発生の条件(±～+)

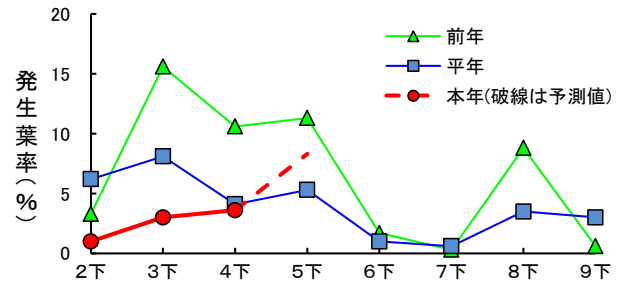


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 被覆栽培はカンザワハダニの発生を助長する傾向にあるため、一番茶の摘採が遅い園では圃場観察を徹底し、発生茶園では農薬の摘採前使用可能日数に注意して防除を行う。

また、一番茶摘採後においても本種の発生が見られる園では防除を徹底する。

(2) 生息部位である葉裏へ薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一薬剤は年一回の使用とする。

2. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況 (図1参照)

発生株率：0.6% (平年0.3%、前年0%)

(発生圃場率：14.3%)

平年比：やや多(±～+)

前年比：多(+))

(2) 5月の気象予報

気温が高く、多発生の条件(+)

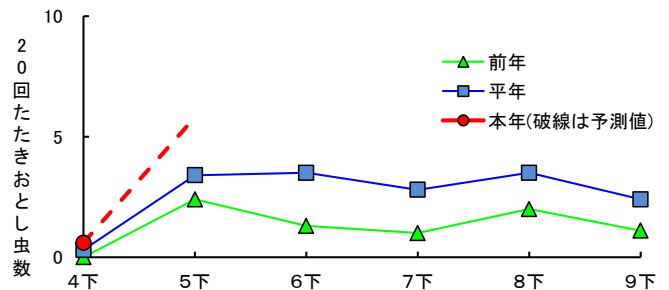


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況 (図1参照)

発生株率：0.7% (平年2.1%、前年0.1%)

(発生圃場率：57.1%)

平年比：やや少(－～±)

前年比：並(±)

(2) 5月の気象予報

降水量がやや多いものの、気温が高く、やや多発生の条件(±～+)

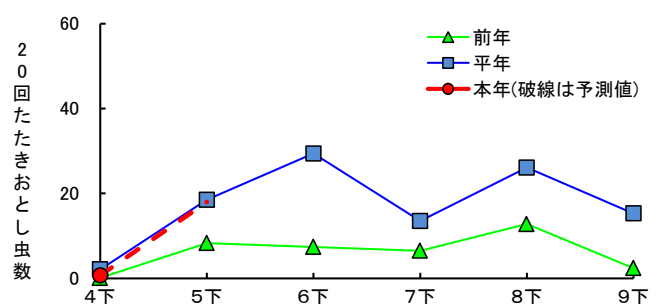


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いので、葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

全国・佐賀県で多発生している病害虫及び新たに発生した病害虫

主に3月23日～4月25日までに発表されたもの

警報・注意報（重要な病害虫の多発生が予想され、早めに防除する必要があるときに発表）

作物名	病害虫名	九州・沖縄・山口		その他の都道府県	
		注意報	警報	注意報	警報
イネ	縞葉枯病			3/28 埼玉県 4/11 群馬県	
ムギ類	赤かび病			4/1 愛知県	
コムギ	赤さび病			3/30 愛知県	
タマネギ	べと病	4/21 山口	4/5 佐賀県	3/30 島根県	
苺・柿	べと病			4/6 大阪府	
ネギ	べと病			3/23 徳島県	
ネギ・キャベツ	柿アザミマ・柿えそ条斑			4/20 京都府	
レタス	べと病			3/29 香川県	
ブロッコリー	べと病			3/29 香川県	
ばれいしょ	疫病	4/18 長崎県			
さとうきび	メイユウ類	3/25 沖縄県			
	アトウガネ	3/25 沖縄県			
ナシ	黒星病			4/14 愛知県	
モモ	せん孔細菌病			4/20 福島県	
作物全般	アブラムシ類			4/11 群馬県	

特殊報（新たな病害虫が発生した時などに発表される）

作物名		病害虫名	発表日及び発信元
野菜	ハウレンソウ	べと病（レース13）	3/22 徳島県
	レタス	白絹病	3/31 徳島県
果樹	オリーブ	がんしゅ病	3/29 神奈川県
花き	シネラリア	えそ斑紋病（INSV）	4/5 香川県

農薬の適正使用を徹底しましょう！

- ◎水稲育苗箱に農薬を施用する場合は、**農薬が育苗箱からこぼれ落ちないように、畦畔等で行うか、育苗箱の下に不浸透性のビニルを敷く等の対策**をとり、散布しましょう。
- ◎農薬の登録内容は変更されることがあります。
使い慣れた農薬でも、ラベル等で登録内容を確認して使いましょう。